○　服装が派手になる。
○　教師を意識的に避けたり，反抗的態度が目立つ。
3．身体・精神面の異常傾向
○　神経質である。
○　不安傾向が著しい。
○　元気がない（顔色がよくない)。
○　ふさぎこむ（友だちとしゃべらない)。
○　頭痛，腹痛がおこりやすい。

(3)　面接による予測

観察により，その問題となる行動が継続するようであれば，面接をし、本人の気持ちに触れてみることが必要になってくる。このとき，「現象」面に目をむけるのではなく，「心」の面に目をむけて，子供を理解してやることが大切である。

なお，面接のときは，特に次の点に留意したい。

○　「いつでも」，「どこでも」の姿勢で，できるだけ子供と接触をはかるようにする。
○　こちらが心の窓を開いて，話し合える雰囲気をつくる。
○　子供の心の底にあるものを察知する。

(4)　諸検査・調査で確認を

観察や面接はどうしても教師の主観がはいってきてしまう。そこで，この危険性を少しでも排除するために，客観的なデータが必要になってくる。今まで実施した諸検査・調査をもう一度検討してみると，子供を理解していくうえで，新しいものを発見することがあるものである。しかし，解釈にあたっては，決して絶対視することは避け，限定してみていくことに留意すべきである。

(5)　その他，班日誌・日記・作文等で

生活班を導入している学級・学校においては，班日誌の活用は，個人及び集団を理解するうえで，強力な武器となる。教師の知らない面がありありと書かれ，驚くほどの内容があることも事実である。さらに，子供と子供，子供と教師の信頼関係を打ちたてていくうえにも，班活動は見直されるに十分